古典落語大系　第六巻

責任編集　江國　滋
大西信行　永井啓夫
矢野誠一　三田純一

三一書房

古典落語大系　第六巻

一九六九年十一月十五日　第一版第一刷発行
一九七三年　九　月三十日　第一版第二刷発行

編　者　江國　滋・大西信行・永井啓夫
矢野誠一・三田純一
©　一九六九年
発行者　竹村　一
発行所　株式会社三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京（二九一）三一三一～五番
郵便番号一〇一
振替東京八四一六〇番
印刷所　株式会社三陽社
製本所　東京美術紙工

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

古典落語大系　第六巻　目次

道具屋（どうぐや）―天王寺の道具屋……七
子褒め（こほめ）―おだて……二六
野ざらし（のざらし）―都ざらし紀行……三六
今戸焼（いまどやき）―今戸焼の可楽……四八
坊主の遊び（ぼうずのあそび）―落語的売春制度批判……五五
垂乳根（たらちね）―垂乳根のモデル……六五
悋気の火の玉（りんきのひのたま）―煮つめた女の性……七四
宿屋の富（やどやのとみ）―西の富・東の富……八二
藁人形（わらにんぎょう）―生世話の世界……九五
あんまの炬燵（あんまのこたつ）―落語の演出・その視点……一〇四
猫の皿（ねこのさら）―じいさま、がんばれ……一一三
口入れ屋（くちいれや）―落語と季節感……一一八
寝床（ねどこ）―現代の寝床芸……一二七
大工調べ（だいくしらべ）―ちか頃落語家の態度……一四二
つるつる―永遠の古典……一五六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

浮世床（うきよどこ）―『浮世床』と江戸文学と……一六八
火焔太鼓（かえんだいこ）―描写を超越した芸……一七八
しめこみ―おふさという女……一九〇
御慶（ぎょけい）―『御慶』は文字に限る……一九八
甲府ィ（こうふィ）―ある若夫婦……二一二
唐茄子屋（とうなすや）―名人円右の唐茄子屋……二三三
干物箱（ひものばこ）―声色屋善公……二四一
松引き（まつひき）―この主従……二五四
甚五郎（じんごろう）―落語の、と、講談の……二六六

装幀　長尾みのる

古典落語大系　第六巻

道具屋（どうぐや）

馬鹿は、隣の火事よりこわいなんて、うまいことがいってありますが、愚かなものは、落語のほうでは、米びつとされております。これが出てまいりますと、はなしのほうも、なにかおかしくなるという按配で……。

「ああ与太、来たな、いまおっかさんが来て、泣いて行ったぜ」
「はは、色男にはなりたくねえ」
「なにが色男だ」
「女を泣かせる」
「ばかなことといってちゃしようがねえな。おまえ、遊んでるってえじゃねえか」
「いや、遊んでない」
「そうかい」
「ここんとこ、陽気が暑いからね、ずっと昼寝をしてた」
「なにをいってやがる。昼寝なんてものは、仕事のうちにははいらねえ。なんかやんなくっちゃいけないよ。商いでもやってみろ」
「商いはずいぶんやった」
「偉いな」

「ああ、そばから飽きた」
「なにをいってる。飽きずにやるから商いじゃないか。そばから飽きちゃいけない。なにをやった」
「うん、暮れに観音さまの年の市へ出てね」
「おお、威勢のいいとこへ行きやがったね。なにを売ったんだ」
「市の売りものってえと、たいていきまってるよ。三方、羽子板、しめ飾り、だいだい。そういうものはどこの店でも売ってるから、あたいは、おを売っちゃった」
「なんだいその、おてえのは。ああ、苧か、とも白髪といって縁起のいいもんだ。麻糸だな？　あれ売ったのかい」
「売ったんだよ。むこうへ行ってね、だまってたら、市のあきんどは、大きな声でどならなくちゃいけませんよっていった人があったからね、ええ、まかりましたまかりました」
「うまいな」
「しめか、飾りか、だいだいか、海老をお買いなさい」
「そんなもんも持ってったのかい」
「持ってかないんだけどね、前の店にならんでた」
「人んとこの店手伝ってちゃいけない」
「そう思ったからね、こんだ下っ腹へ力を入れてね、おおっつったよ」
「なんだいそりゃ」
「品物が苧だからさ、おおっつったらね、隣りが羽子板屋でね、そこの、おじさんがおこっちまいやんの、うちじゃア、女だの子どもさんがお得意で、せっかく人の集まったところを、おまえさんがワッてえからみんな逃げてっちまう。もっとおだやかな声が出ねえかってやんの、どういうのがおだやかなんでしょうって聞いてやったらね、やの字をつけてみなよ、豆屋でございっていって、あのやの字がいいんだからって。で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そんなもんならわけはねえと思って、おやでござい」
「なんだいそりゃ」
「おに、やがついてら。おやでござい。おや、おやまあしばらく」
「しようがねえな」
「そのうちにね、くもってきたから、番傘売ってもうけてやろうと思ってね、こんなに積みあげたら、お天気んなっちゃって一本も売れない。ええ、どうも店がさみしいと思ったからね、こんだ、串柿に、だいだいをならべてね、品物が多いから二っつ呼んだの、おに柿でおやっ柿おやっ柿」
「おやっ柿てなおかしいね」
「おにかさでおやかさ」
「そらどうも、ごろがわるいねえ」
「おにだいだいで、おやだいだい」
「おお、なんか縁起がよさそうだなあ」
「あとへ、かさにかきが残っちゃって、おやだいだいかさっかき」
「しまらねえなあ」
「夏んなってね、唐辛子を売ったよ」
「唐辛子てな葉唐辛子。あらあおめえ、威勢のいい商売だよ。まず野菜でもって葉唐辛子な。魚のほうで初鰹。これがこなせりゃ一人めえだ。おめえ、出かけたのかい？」
「出かけちゃった、朝はやく。かんかん照りでね、もうね、汗が目にはいっちゃって」
「いや、そんなことはかまわねえが、どのくらい売れた？」
「どのくらいにもこのくらいにもねえ、お昼まで歩いてて一わも売れない」
「どうしたんだい」

「あんまりふしぎだからよく考えてみたら、だまって歩いてたから売れねえ。そいからひとつ大きな声で景気よくどなってやろうと思ったら、品物の名前を忘れちゃってね。はてな、これは三ツ葉ではないし、うどではないし、ねぎではないし、枝豆ではねえ。だんだん出てこなくなっちゃったんだよ。吾妻橋の上まで来たら、あんまり日なたばっかり歩いてるから、葉がこんなによれよれになってね、しおれちまいやがったから、こりゃア売りもんにならないと思ってね、かごをさかさまにしてみんな川んなかへうっちゃっちゃった」

「いい度胸だねえ」

「するとこれが水へつかったからね、勢いがよくなりゃがってね、青々とこう流れて行くのを見てね、ああうまそうな葉唐辛子だってんで思い出した」

「おまえは長生きができるよ。話はそれっきりか」

「こうなりゃあたしだって欲が出ますよ」

「ほほう」

「いくらでもいいから取ってこようと思ってさ、着物を脱いでね、すっ裸んなってね、橋の上からドブーンとはとびこめません」

「なにをいってやがる。そのねえ、ませねえ話はどうでもいい、ませる話をしな」

「はじのほうからポチャポチャはいってったんだよ。あたいは顔をつっこんでりゃ体が浮くんだけどね、顔上げると沈んじまう。でね、顔つっこんで、ポチャポチャポチャポチャポチャ、へへ、犬っかきで泳いでってね、もうここいらでいいと思って顔を上げてみたら唐辛子はいません」

「どうした」

「お留守だ」

「なにがお留守だ、よく見ろ」

「よく見たらね、唐辛子の流れていくのと、あべこべのほうへ泳いでた。たいへん遠くなっちゃったから、あき

らめて上へあがった。けどおじさんの前だがね、親切な人があってね、あたいが水んなかはいってるあいだに、天秤もかごもね、はき物も着物も財布もみんなまとめてね」
「ははァ、とどけてくれたか」
「とどけようとは思ってんでしょうがね、いまだにとどかねえ」
「どうもしようがねえな。おまえは器量以上のことをやろうとするから、やりそこなうんだ。どうだ、おじさんの商売ゆずってやろうか」
「おじさんの商売？　大家じゃないか。じゃあの家作、あたいがもらって、晦日、みそかの店賃はあたいが……」
「よくばっちゃいけない。あれは、おじさんの表看板。おじさんの内職、つまり世間に内緒の商売がある」
「世間に内緒の？　ははァ、あれだな」
「あれだなって、おまえ知ってるのか」
「ちゃんと知ってら、だからわるいことはできねえ」
「おかしなことといっちゃいけねえ」
「おじさんの商売、頭に、どの字がつくだろう」
「どの字が頭に？　うん、つくな」
「ほれみろ、どうも目つきがよくねえと思った。泥棒。おじさんの商売、泥棒だな」
「こんなばかはねえな、だれが泥棒なんかやるかい。おじさんの商売は道具屋だ」
「道具屋、ははァ、やっぱりどがつかァ」
「どうだ、道具屋。やってみるか」
「もうかるかい」
「もうかるってほどの仕事じゃアないが、おじさんのは、俗にてんこぼしといってな、ゴミのほうをはたくんだ。まあ、ろくなものはねえが、これでなかなか目ききがむずかしい。どうだ、おまえ、目がきくか」

「ああ、目はきくよ」
「そうか」
「ああ、おじさんのうしろで猫があくびしてるのなんか、よく見えら」
「これが見えなきゃめくらだ。そうじゃねえ、はやいはなしが、ここにあるこの鉄瓶だ、これがおまえにふめるか」
「ふめるよ」
「えれえな、ふんでみろ」
「お湯がちんちん煮たってら」
「煮たってたってかまわねえじゃねえか、ふんでみろ」
「ふんずけりゃ、火傷すら」
「あんなこといってやがる。足でふむんじゃねえ、目でふむんだ」
「えっ、目で？」
「わからねえ野郎だな。いくらだか、値をつけられるかてんだよ」
「なんだ、なら、そうとはやくいうがいいや」
「わかるか」
「わからねえ」
「いばってやがら。まあ、そのうちに、おじさんが、市へつれてっておぼえさせてやろう。おめえのうしろに、つづらがあるだろう、品物がはいってる。つづら、出してみろ」
「ああきたねえ」
「きたないつなんざ、どうでもいい。そんなかの品物、そこへ出してみろ」
「ああずいぶん、いろんなものがあるね。鉄なべのふたのないのね、やかんのつるのないの、ないものずくしだ

よ。いやあ、のこぎりが出てきやがった。あかののこぎり」
「おまえ世の中にね、あかののこぎりってのはないよ。そら火事場でひろって来たんだよ」
「ああ、かじのこだこりゃ。ああ、刄がかけてるね。むし歯だ」
「おまえ、ふしぎなことをいうね。のこぎりにむし歯ってのはおかしいやな。なんでもいいからもとどおりにしまいな」
「大きなおひなさま」
「こらァね、古代びなのうつしでな、ほんものなんざありっこねえが、ま、持ってってみな。物好きが買ってくから」
「ははァ、おひなさま首かしげてんね。晦日の勘定がおっつかねんじゃねえか。いやどっちにも曲がるよ、ああ、ぐるぐるまわらァ。ははァ、あっ抜けた」
「抜いちゃいけないよ、おい。道具屋てえのは、ものをまとめんのが商売だ。おめえのようにこわすやつはねえ」
「だけどさ、鼻がかけてるよ。鼻っかけだ」
「鼻っかけてのはおかしい。ねずみがかじったんだ」
「ああ、ねずみが。ねずみ出るかい？」
「出るねおれのうちは。台所がひろいせいか、夜っぴてあばれてやがる」
「ねずみがいなくなる法ってのおせえましょうか」
「ああ、おまじないかい」
「おまじないじゃアない、なくなっちゃう。ああ、あんまり大きな声じゃアおせえられない」
「どうして」
「ねずみが聞いてるから」
「なにをいってやがる」

「わさびおろしってものがあるでしょ？　金のぎざぎざのついたものさ。あたり金ともいうだろ？　あすこにこう、ご飯つぶをねりつけてね、ねずみの出る穴にこうやってあてがっとくんだよ。夜中にチョロチョロ、チョロチョロっとねずみがやってくるよ。おやおや、今夜は台所のおはちまで行かなくっても、ここにおまんまがある、ありがてえってんでかじるでしょ。どだいがわさびおろしだからね、かじるたんびにねずみがへっちゃってね、朝見るとしっぽばかりだ」

「おまえの考えは、それくらいのことだ。これに元帳があるから貸してやろう、これからかけ値をして売ればもうけはおまえのもんだ。蔵前通りにずうっと道具屋がならんでる、あの仲間のうちにな、吉兵衛さんてえ人がいる。な、あだなをおせっかいの吉兵衛さんてえくらいで、面倒みがいい。その人におそわるんだ。しっかりやってこいよ、うっかりするんじゃアねえぞ。わかったな、返事をしろ」

「あいよ。……どうしてああ、あとからあとから小言が出るんだろうね、……ああならんでら、ここだな。ええ、ちょいっとうかがいますがねえ」

「はい」

「こんなかに吉兵衛さんて人いますか？」

「へえ、吉兵衛はあたしだ」

「ははあ、おまえさんが吉兵衛さんか。どう見たって吉右衛門には見えねえ」

「なにをいってる。なにしに来なすった」

「え、なにしにってね、あなたはね、おせっかいの吉兵衛さんてえんでしょ」

「すごい人が来たねえ。そういうことはね、陰でいう人はあるがね、面とむかっていわれたのはきょうがはじめてだよ」

「へへ、これからちょいちょいいます」

「なんだい、おまえさん、ああ、鳥越の大家さんとこから来たかい？　うん、こないだ話があったよ。うちにお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com